



災害情報を逸早く正確に届けるのは誰か

関西学院大学法学部 教授 原田 賢一郎

この図書紹介の原稿を執筆している8月に入り、北日本から西日本にかけての広い範囲で長期にわたって大雨が降り、土砂災害や河川の増水・氾濫、低い土地の浸水などの災害が各地で発生している。特に8月3日から5日の東北地方から北陸地方にかけての記録的な大雨では、気象庁が記録的短時間大雨情報を数多く発表したり、山形県と新潟県に大雨特別警報を発表したりし、これらに呼応するかたちで各地の市町村が緊急安全確保や避難指示を発令するといった事態が生じた。このように、災害に関する情報は気象庁や市町村などの行政機関から出されるが、住民が避難を判断するためには、それらの情報を彼らに逸早く正確に届けることが必要になる。

そうした観点から、現在、「特務機関NERV(ネルフ)」というツイッターアカウントやスマートフォン用アプリが、その情報配信の国内最速レベルの早さや、内容の正確さ、見やすさなどで注目を浴びつつある。驚くべきは、このような優れた防災用のツイッターアカウントを運用し、開発したアプリを広告も掲載せずに無料で利用者に提供しているのは、報道機関や大手IT会社ではなく、ましてや行政機関でもなく、

創業12年、従業員数16名(2021年4月末時点)のITセキュリティ会社であり、同社の若き代表取締役である石森大貴氏が、大学生であった2010年に一人で始めた取組がその起源ということである。

この人気アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」に登場する組織名を冠した

プロジェクトが、一人の大学生のいわば「遊び」から2011年の東日本大震災を経て日本屈指の社会インフラへと育っていった10年の軌跡を描いたのが、『防災アプリ 特務機関NERV—最強の災害情報インフラをつくったホワイトハッカーの10年』(川口穰/著、平凡社、1,760円)である。

宮城県石巻市出身の石森氏は、東日本大震災で母親や妹が避難せず津波に巻き込まれ奇跡的に助かる一方で、親しかった伯母を亡くしている。彼はそのことを『逃げて』という声が必要な人に届かなかった。次はちゃんと逃げなきゃいけないし、仮に何事もなくとも、その次も逃げなきゃいけない。もう二度と、災害で大切な人を亡くしたくないんです」と振り返り、自らの「使命」として防災に対する強い熱意と卓越した技術力を傾注して防災情報システムを作り、情報配信の迅速さやカラーユニバーサルデザインなどの面で日々改良を続けてきた。その間、IT業界の若き逸材たちを巻き込み、外部の様々な関係者を動かしていくさまは驚嘆に値する。

もちろん、その歩みは決して平坦ではなく、石森氏の言葉を借りれば「防災をやりたい、情報の力で『逃げて』の声を伝えたい」と思い続けてきましたが、実はこれが役に立っているんだろうかという疑問も感じていたんです。どんなに情報を発信しても、実際に逃げる判断をするのは情報を受け取ったその人です。情報じゃ命を救えない。そのことにうすうす気が付いて、自分のやっていることの納得感が弱まりつつありました」という状況の中で自らの心を重く閉ざしてしまったこともある。それをどのように克服して、プロジェクトが前に進んだのか。皆さんに読んでいただきたい一冊である。



『防災アプリ 特務機関NERV—最強の災害情報インフラをつくったホワイトハッカーの10年』
川口穰/著 平凡社